特集

いぬ・犬・イヌ

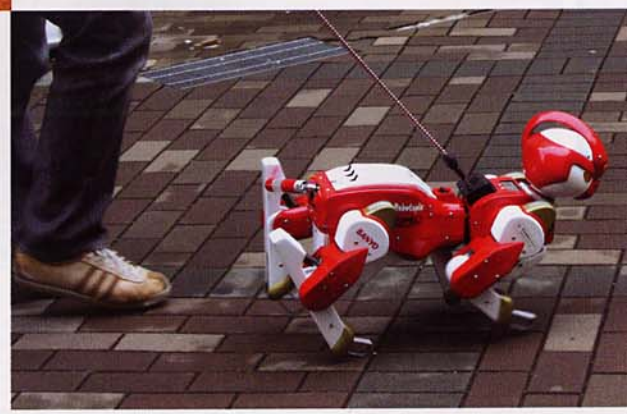
——縄文犬からロボット犬へ

人とイヌのかかわりの歴史は、人間が野生をいかに実用的に、ときに呪術的にコントロールしてきたかを示す指標でもある。オオカミが絶滅し、ロボット犬が誕生する日本。人びとはイヌとこれからどうつきあってゆくのか。

グアテマラの仮面（標本番号H153087）

オーストラリアの野犬ディンゴ。写真提供：久保正敏

ブリキ玩具（標本番号H133997）



愛知万博に出展された電気通信大学・木村研究室の犬型ロボット「鉄犬4号」
写真提供：電気通信大学広報室

生きものと道具のあいだで

野林 厚志（のばやし あつし） 文化資源研究センター

「犬は人につき、猫は家につく」という言葉に代表されるように、イヌは古くから人間にとってもっとも身近な動物であった。世界の各地では、それぞれの土地の生活にあったイヌが飼われ、人間の目的にあったイヌが作りだされてきた。番犬、狩猟犬、牧羊犬、護羊犬、家畜追犬、救助犬、軍用犬、警察犬、食用犬、介助犬、盲導犬、聴導犬、愛玩犬、コンパニオン・ドッグ、医療実験用犬等々、古今東西、イヌが人間に尽くしてきたことについては枚挙にいとまがない。

イヌに限らず、人間が動物を飼うのは何かしらの目的があるからである。他の家畜動物の大半は、食肉の獲得や乳製品の利用、毛や毛皮の利用等、飼育される目的がはっきりしている場合が多い。これに対して、人間はイヌが本来もっていた特徴のうち、自分たちにとって都合のいい部分を選択的にとりいれた繁殖を繰り返してきた。その結果、見た目にずいぶん違うイヌの品種が数多く作られてきた。最近では生身のイヌを改良するのに飽き足らず、ロボット犬なるものが改良を重ねられ、商品化されている。

人間が利用するものは、広い意味でとらえれば、道具とよぶことができる。すなわち、イヌとは人間にとって道具のような側面をもった動物ともいえるだろう。道具は役に立っているうちは、そばにおいてもらえるが、役に立たなくなったら、たいてい捨てられてしまう。生命ある道具という考え方が適切かどうかということについては意見が分かれるであろう。しかしながら、生きとし生けるものの運命を握っているという重みを人間は少なくとも感じとる必要はなかろうか。イヌが生きものとして人間とともに生きていくのか、それとも道具としてその役割を全うし続けるのか。人間の生命（いのち）に対する考え方の根っこが、じつは、古くからの「友人」であるイヌとのつきあい方に見え隠れしているように思われる。

今年はイヌの年。生命あるものとどうともに生きていくかということを、人間とイヌとのあいだに築かれた古く、深い関係を手がかりに考えてみてはどうだろうか。

ヒツジの群れを目指して出かけるモンゴルの牧羊犬。写真提供：小長谷有紀

カナダ・イヌイットの犬橇。写真提供：岸上伸啓

ボリビアの仮面（標本番号H109844）

旧知の友——遺跡から出てくるイヌ

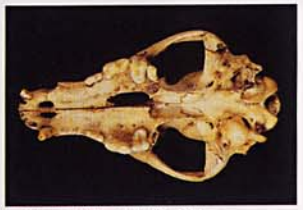
小宮 孟（こみや はじめ）（財）千葉県教育振興財団

私たちの食生活になじみ深いウシ、ヒツジ、ヤギ、ブタといった家畜動物のもっとも古い骨は、約八〇〇〇～九〇〇〇年前の西アジアの新石器時代遺跡から出土する。しかし、イヌの骨は、さらに古い中石器時代～旧石器時代末の西アジアやヨーロッパの遺跡（約一万二〇〇〇～一万五〇〇〇年前）から出土する。更新世末期（約一万年前）の人類とオオカミは、ともにリーダーを中心として、集団で大型草食獣を狩るという行動があったと考えられている。ライバルだったオオカミの群れを家畜化して、狩りの手足として確保するために、イヌが生まれたと理解されている。これが事実であれば、人類にとっても重要な画期になったと思われる。残念ながら、遺跡に残された証拠からその起源地や年代を特定するのは困難だ。原始のイヌは祖先種であるオオカミとの形態やサイズ差が小さいと見込まれるためである。

日本犬頭蓋側面。ストップ（鼻梁部のくぼみ）がある

縄文犬頭蓋側面。頭蓋が低く、プロポーションは原始的である

日本犬腹面。縄文犬に比べて横幅が相対的に広い


縄文犬腹面。生前の歯牙損傷が激しい

日本最古のイヌの骨は、神奈川県にある縄文早期の遺跡から出土した約八五〇〇年前の下顎骨破片である。私たちが縄文犬とよぶこのイヌは、柴犬級の中小型犬を主体とする集団で、当時の日本の在来オオカミに比べて身体や歯牙のサイズが明らかに小さい。このような事実から、縄文犬は縄文人が列島内で家畜化したものでなく、大陸からの外来犬と考えられている。

縄文犬の出土例は縄文早期・前期には少ないが、中期（約五〇〇〇年前）以降に急増し、しばしば埋葬状態で発見される。死者と一緒に埋葬されたと思われるものや、四肢に骨折治癒痕のある個体もまれに出土することから、縄文人はイヌを家族に準じて扱い、生前の事故などでイヌが歩行困難になった後も手厚く保護したと解釈される。

縄文犬は側頭筋や咬筋付着部が発達し、四肢も頑丈であることから、小型でも噛む力が強く、動きも敏捷だったようだ。しかし、切歯と小臼歯を生前に欠損している場合が多く、写真に示す約四〇〇〇年前の個体では左右の第一・第二小臼歯、左第一切歯の計五本を生前に失っている。右犬歯の長さが写真の日本犬より短くみえるのは、生前に破折した犬歯をその後も使い続けたため、破折面が犬歯の先端部のような形に研がれたことによる。イヌは前歯部を使って噛みつくので、この部分の損傷が激しいことは、噛みついたものを長時間強い力で引き合うことが多かったことを物語る。優秀な猟犬は追いつめた獲物の耳や後肢の腱などに噛みついて動きを止め、猟師が至近距離から銃撃するまで放さない。縄文犬の主要な用途が猟用で、獰猛なイノシシとの格闘をかいくぐっていたとすれば、生前の激しい歯牙の消耗や四肢の骨折などは説明可能である。

貝塚出土のイノシシは復元体重一〇〇キロを超す個体もめずらしくない。鋭い牙の反撃をうけて死亡する縄文犬も少なくなかったと推定されるが、遺跡出土の埋葬犬が猟で死んだとは限らない。というのは、古代エジプトや古代中国ではイヌを冥界と現世を結ぶ聖なる動物とみなしていたからだ。日本でも猟でイヌが死ぬと、猟師たちは祟り神の霊を畏れて猟場近くの山で特別の葬送儀礼をおこなうので、死体は集落にもちこまれなかった。縄文人のあいだに、このような信仰が伝わっていた可能性は皆無とはいえない。遺跡には古代犬の謎がまだ多く残されている。

イヌをめぐる迎春呪術

吉野 裕子（よしの ひろこ） 民俗学研究家

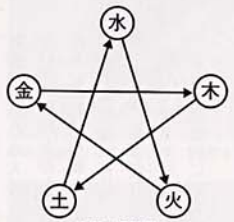
今年は十二支の戌年なので、昨年から街にはイヌにちなんだ商品などが目についた。十二支とは、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥のことで、本来、植物の栄枯盛衰を指した。十二支に獣が配当されるのは、後漢の王充撰『論衡』にはじまる。一番目「子」がネズミ、二番目「丑」がウシと続き、一一番目「戌」がイヌとなるが、その由来は不明である。

五行説では、この世界は木火土金水という五つの元素的要素である「気」からなっている。そして、木は火を生み、火は土を生むような「相生」の関係と、金は木に剋ち、木は土に剋つといった「相剋」の関係によって世界は変化するという。

一年の構造表にみられるように、申酉戌の三支は金気方局を形成して、寅卯辰の春の木気に相対する。木気は、「金剋木」の法則によって、金気に力を奪われる。一年を支配する年の神は、一二年で太陽のまわりを一周する木星であるため、新春を無事に迎えるには、木気を抜け、金気をくじかねばならない。というわけで古代中国では、旧一二月、城門に金畜のイヌを磔にして、これを最高の迎春呪術とした。

何事も中国に倣ってきた日本だが、都を城壁で取り囲む風習などないので、「イヌの磔」の実行は到底不可能だった。そこで私どもの祖先は考えた。金気に属するものは何もイヌに限らない。金気は本来、天とか太陽の象徴なので、色は白、形は円、性状は堅、固いのが本性。それならば白く丸く固い餅を金気の代表として、正月に食べてしまえば、このうえない金気剋殺の迎春呪術になるのではないかと。あるいは、丸い餅を重ねて鏡餅とし、「鏡開き」と称して、十二支のうち一一番目にあたるイヌに類して、正月一一日にこれを特に粉々に

大晦日に神島でおこなわれる祭り、ゲーターサイ。撮影：渡辺良正



木 土	剋	土	木は土を剋し
土 水	剋	水	土は水を剋し
水 火	剋	火	水は火を剋し
火 金	剋	金	火は金を剋し
金 木	剋	木	金は木を剋す

五気の相剋図

十二支による一年の構造図。アラビア数字は旧暦の月を示す。○印は土気・土曜を示す

月	易	十二支	十干	五声	五味	五虫	五常	五臓	五官帝	五人帝	五天帝	五星	五音	五事	五時	五方	五色	五行
三月・二月	震	寅・卯・㊌	甲 乙	角	酸	鱗	仁	肝	句芒	大皞	青帝	歲星（木星）	呼	貌	春	東	青	木
四月・五月	離	巳・午・未	丙 丁	徵	苦	羽	礼	心	祝融	炎帝	赤帝	熒惑（火星）	笑	視	夏	南	赤	火
		辰・未・戌・丑	戊 己	宮	甘	倮	信	脾	后土	黄帝	黄帝	塡星（土星）	歌	思	土用	中央	黄	土
七月・八月・九月	兌	申・酉・㊋	庚 辛	商	辛	毛	義	肺	蓐収	少皞	白帝	太白（金星）	哭	言	秋	西	白	金
十一月・十二月	坎	亥・子・㊍	壬 癸	羽	鹹	介	智	腎	玄冥	顓頊	黒帝	辰星（水星）	呻	聴	冬	北	黒	水

五行配当表。縦に読むと、色彩、方位、季節、天文、生物、人間の感覚、徳目といった万象が配当されていることがわかる。横に読むと、たとえば木気は、青、東、春などを意味し、「青春」「青年」が人生の春や若者を指す謂われを示し、気を同じくするものは互いに象徴関係にあることがわかる

オオカミは消え、タヌキは残った

高見 一利（たかみ かずとし）　大阪市天王寺動植物公園事務所飼育課・獣医師

砕き、残さず食べてしまえばよいと。さらに金気三文のなかの「酉」はトリなので、害鳥を追い払う豊年行事「鳥追い」をし、「羽根突き」をすれば、「イヌの礫」の代わりになるであろうと。

この呪術思考は「迎太歳」という祭りにまでおよぶ。太歳とは木星の神霊化を指すが、この太歳の在泊方位は「太歳方」といって、年の顔となり、年間を通しての大吉方となる。来年は「戌」の方角、西北西に太歳が在泊するので、戌年というわけ。この太歳を迎える祭りが、伊勢湾頭の神島で大晦日に斎行される「ゲーターサイ」である。陰陽五行が忘れられて久しいので、謎の奇祭として有名である。年の神の太歳は木気なので、ゲーターサイの主要目的は金気刎殺。そのため大晦日の一夜を徹して固いグミの枝を押し曲げて巨大な輪を作り、これに白紙を巻き、白く丸く固い金気象徴物「日輪」とし、元旦の早朝、浜辺に担ぎだして小一時間、竹槍で激しく突き上げる。

金気を徹底的に刎殺するこの行為は、外観はまったく異なるが、原理は「イヌの礫」に等しい。しかも戌年の場合、年神の在泊方位にかかわるイヌを礫にすれば、貴重な太歳方を冒すことにもなりかねない。イヌに頼ることなく、金気の代替物を種々案じだして、迎春呪術とし、天地間の順当な運行への参画をはかってきた日本人の知恵を思う。

オオカミは現在ペットとして世界中で飼育されているイヌの原種とされている。ジャーマン・シェパードそっくりで、大きくて力強く、それでいて親しみやすい姿のためか、絵本でおなじみの動物であるためか、とにかく動物園でも人気者である。

今の日本人で、野生のオオカミを見たことがある人はほとんどいないだろう。しかし、日本にも昔オオカミがいた。本州、四国、九州には二ホンオオカミが、北海道にはエゾオオカミが棲んでいた。残念ながら、どちらも絶滅し、今では見ることができないといわれている。それらのオオカミは、大陸に棲んでいるタイリクオオカミとは別種、あるいは別亜種とされているが、詳しいことはわからない。剥製や全身骨格などの標本もわずか数体ずつが残っているにすぎず、遺伝的な調査もままならない状況である。

ヨーロッパオオカミ（*Canis lupus lupus*）。タイリクオオカミの一亜種（大阪市天王寺動物園で撮影）

最後の二ホンオオカミは、一九〇五年に奈良県で捕獲された個体だといわれている。エゾオオカミが絶滅したのも一九〇〇年ごろのようである。どちらも昔は神として崇められたらしい。シカを中心とする大型草食動物を捕食するため、その力強さが畏れられると同時に農作にとっての害獣を狩る行為が歓迎されたのだろう。オオカミは日本の生態系の頂点に立っていた動物である。そのことを考えると、崇められていたことも当然であるように思える。

ニホンオオカミ（*Canis hodophilax*）の剥製。現存のオオカミと比べてかなり小さい（国立科学博物館で撮影）

今ではもう見ることができないはずの二ホンオオカミが、二〇〇〇年夏に九州の山中で目撃され、写真が撮影された。これが本当にニホンオオカミであるのかという議論が戦わされたが、結局のところ定かではない。目撃情報はこの件に留まらず、一〇〇年前に絶滅してしまったとされるニホンオオカミが未だに生存しているという説も根強い。

昔の生態系を再現するためにオオカミを日本に復活させる計画が、真剣に検討されていると聞く。外来のオオカミを野に放つという計画らしいが、野生動物は人間のコントロールが必ずしもおよぶ存在ではない。計画の是非について一概に言い切ってしまうことはできないが、慎重に検討すべき内容であることに間違いはない。

オオカミは見られなくなったが、日本には今でも野生のイヌの仲間が棲んでいる。キツネとタヌキである。どちらもほぼ全国的に分布しており、今のところは絶滅が心配されるような動物ではない。キツネもタヌキも、哺乳動物のなかではウサギなどと並んでもっとも身近な動物である。人を化かす動物として昔話でもおなじみであり、人里近くに出没することも多い。特にタヌキは、都心部で見かけることもある。いずれも雑食で、小動物を狩ることもあるが、民家の残飯をあさったり、野生動物との触れあいを求める人間に餌づけされたりする。このような姿に、「かわいい」あるいは「迷惑だ」といったように見くだすことはあっても、オオカミのように畏敬の念を感じさせる発言を聞くことは、ほとんどない。

ホンドギツネ（*Vulpes vulpes japonica*）。アカギツネの一亜種で世界中に広く分布している（東京都井の頭自然文化園で撮影）

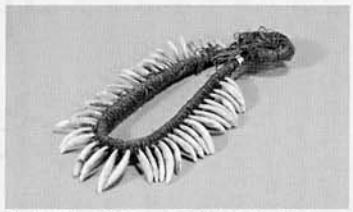
ホンドタヌキ（*Nyctereutes procyonoides viverrinus*）。国内に広く分布しており、都会でも見られる（大阪市天王寺動物園で撮影）

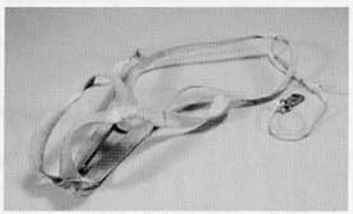
力強くもなく、敬われることもなく、何でも食べるずうずうしい動物が、結果として生き残り、人間のまわりで新たな生活の場を開拓しつつある……。こんなキツネやタヌキのことを思うと、私も十分に生き残っていけそうだと勇気を与えられる。

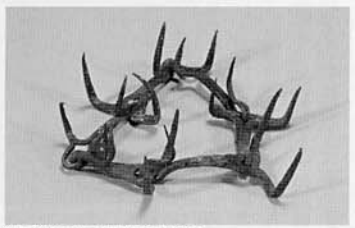
人とイヌをつなぐモノ

◉ 野林 厚志（のばやし あつし）　文化資源研究センター

おびただしい数のイヌの歯でできた、パプアニューギニアなどの首飾りや額飾りは、婚資として用いられた。ハワイなどで見られる、やはり、イヌの歯で作ったすねあても儀礼のときに身につける大切なものである。日本でも、イヌの犬歯を用いた首飾りが、縄文時代遺跡などから出土する例もある。首輪は文字どおり、イヌと人とを「つなぐ」モノで、最近のペットショップではデザインや色もじつにバラエティに富んだものがところ狭しと並んでいる。一方で、西アジア等で使われる牧畜犬の鉄製の首輪には、鋭い鉄の突起が放射状についている。イヌは、家畜に襲いかかる敵に横向きで体当たりするとき、この突起を相手に向かってぶつけていく。また、最近ではイヌの散歩に首輪でなく胴輪を使う人が増えているようだが、犬橇に不可欠なのが軽くて丈夫な胴輪。探検家植村直己もイヌに胴輪をつけて犬橇を走らせていた。博物館のなかにはイヌと人のいろいろなモノ語りがある。


婚資用額飾り。パプアニューギニア（標本番号H164706）


植村直己が用いた犬橇用胴バンド。北米（標本番号H8530等）


鉄製首輪。トルコ（標本番号H7842）